
ほおずき

いえやす

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほおずき

【ZPDF】

N7113D

【作者名】

いえやす

【あらすじ】

わたしが子供の頃、夏のはじまりに母がほおずきを一鉢買ってきました。

梅雨のまだ明け切らぬ7月の初め、ほおずきを一鉢買って帰った。

あれはわたしが何歳のときだったか。

7月に入つてすぐ、母がほおずきを買って帰つてきた。

その場に父がいなかつたので、多分あれは金曜日のことなのだろう。

わたしはてつきり母が一人でほおずき市に行つたのだと思つたのだが、母は貴い物だと言つて薄く笑うだけだった。

母は物静かでおとなしい人だった。

細面の清楚な顔をうつむきがちに、いつもなにかに耐えているようになっていた。

たしかに。母は幸薄い人だつたのかもしれない。

二十数年前の当時でもずいぶん珍しいことだったと思うのだが、父には公認の妻がいた。

だからといって父が非道な人だつたというわけではない。

父はわたしたち母子を決してないがしるにはせず、十分過ぎるほどの責任感を持つて大黒柱としての役割を果たしてくれた。子供のわたしにとっては厳格で立派な父であった記憶しかない。

だが週末の金曜日には父は必ず妾宅に泊まってきた。

わたしが物心付く前からずっとそつだつた。

母は買つてきたほおずきを庭に植えた。

薄黄色の花が美しく、わたしも毎朝せつせと水をやつたものだつた。

花が散り、実が少しづつ赤く染まつといつゝが、父の帰りが遅くなることがあった。

わたしは単純に仕事が忙しいのであるうつと思つていたがそうでは

なかつた。

ある日、わたしは家の近くの公園で中年の女に声をかけられた。
白い薄手の着物を着た中年の女。

母より少し若いだろうか。しかし地味な母とは正反対の派手な女
だった。

厚い化粧も結い上げた髪も子供には慣れないもので、多分わたし
は戸惑っていた。

良く晴れた暑い夏の日で、女のやじていた白い田舎のことをよく
覚えている。

「はじめは、あたしのこと知ってる？」

女はにこやかに話かけてきた。その馴れ馴れしさに胸のつかえる
思いがした。

それまで会つたことはなかつたが、父の妻に違いない、そう思つ
た。

女はわたしを誘い、並んでベンチに腰掛けた。

「おねえさんねえ、あなたのお父さんにとってもよくしてもらつて
いるのよ。わかるかしら？」

わたしは黙つてうなづいた。

「そり……。それにお母さんとも仲良くなれせてもらつてこらのよ
ね」

それは意外だった。

「びっくりした？」

本当はこんな感じであなたと会つてもらつたのは無かつたのよ。

……けど、この子がね

女はそう言って自分の下腹部をなでた。

「この子が授かつてね。それを知らせて置きたかったの。お父さんはあなたがもう少し大きくなつてからにしたいって言ってたんだけど」

女の目が弧を描き細まり、わたしに近所の年寄りの猫を連想させた。

「せっかく授かつた赤ちゃんなんだもの。できればみんなに祝福して欲しいわ。

あなただつてうれしいでしょう？ 弟ができる」と

女はニッとした笑った。暑さのせいいか化粧が少し崩れ口元に大きなしわができていた。

わたしは女の顔から田をそらし、元気な赤ちゃんが生まれるといい、とかなんとか口にしたと思つ。

本当にそう思つていたわけではなくて、早くその場を去りたかった、それだけのために。

ありがとうと礼を言つて見送つてくれた女とはそれきり一度と会うことは無かつた。

家に帰ると珍しく父が早く帰つていた。

わたしは妙な衝動にかられ内緒にしておひつと思つていた女の話を父と母の目の前で話した。

父は一瞬だけ眉をひそめたが、すぐにともとの表情に戻り。

「なんだ、あいつは勝手に……。

すまんな。お前に内緒にしていたわけじゃあなかつたんだ。

驚かせてやる」と思つてな。

どうだ? うれしいだろ。

お前にも年明けには弟ができるんだぞ

父は本当に「うれしそう」と言つた。

母はと笑ふと、こつもと変わらず黙つてうつむいてくる。

「こんなとこまで歩こじこれぬなんじ、もつ^延定期にはいつたんですね」

わたしは少し皮肉をこめて母に、あの女とはよく会つてこるのはかとたずねた。

「ともべあよ。季節^ハ」^ハとくづき園^ハに行く程度ですよ

母はやさり薄く笑つてこた。

父も母もうれしそうにしてこゐなら、こつまでもひねくれているわけにも行かない。

わたしはなにか釈然としない思いを抱えたままだったが、それでその話は終わりになつた。

その夜。

蒸し暑く寝苦しい夜だった。

喉が渴いて水を飲もうと台所に行こうとして縁側で立ち止まつた。月の明るい晩で、庭の様子が縁側から良く見えた。庭に母がいた。

母は黙つて背を向けるよつてしゃがみこんでいる。表情はわからぬ。

しかしなぜかその背はこつもの母と違つて、こんな時間になにをしているのかと声をかけることができなかつた。

わたしはほんやりと母の背中を眺めながら、母のしゃがんでいる場所、あそこはほおずきが植わっている場所ではなかつただろうか、そんなことを考えていた。

母は背中を向けたままぴくっともせすじりとしていた。

どれくらいの時間がたつたのか、わたしは急に寒気を覚え、母に気づかれないように布団にもどつた。

翌朝の朝食の席で、いつもの母を見てほつとしたことを覚えてい

る。

昨夜のあれは夢だつたのだと、安心した。

そんなことがあつてからしばらくして、多分お盆の頃だつた。

夕方家に戻り、ふと縁側から庭を見てびっくりした。

母が庭の手入れをし、雑草や落ち葉などを燃やそつとしていた。

それはいつもの光景だつたのだが、雑草の中にほおずきがあつた。

今朝ほどまで庭でひとりきわ綺麗な赤い実を付けていたはずのほお

づきが。

わたしが少し驚いた表情をしていたのに気づいた母が言つた。

「ああ。さつき見たら虫にやられてたのよ。他にうつむといけないからぬいぢやつたの」

母はなぜかうれしそうに言つた。そして新聞紙を火種に履き集めた雑草に火をつけると、ゆっくりと立ち上つていぐ煙の行方を見上げながら楽しそうに微笑んでいた。

その後、夏が終わり冬が来て年が明けるころになつても、わたしに弟ができることはなかつた。

聞いた話によるとあの女は夏の終わりに流産をしてしまつたらしい。

そのせいかどうか知らないが、まもなく父と女は別れたようだつた。

わたしは外泊をしなくなつた父のことがやはりうれしかつた。

もし弟ができていたら父を取られてしまつたかもしれないのだから。

そう。

それはそれだけの話。
どこの家族にもある、あまり表べたにできない裏話のよつなこと。
ずつとそう思つていた。ずっと。

ほおずきの根が子供を墮ろす薬に使われていたことを知るまでは。
あの夏からどれくらい経つのか。

父はわたしが大学を卒業すると同時に亡くなり、母も一昨年亡くなつた。

女が流産をしたのは近所を散歩中に転んだからで、かわいそつた
がまつたくの事故だつた。

母のせいではない。

しかし、ほおずき見るたびに思い出すのはあの夏のこと。

陽炎のたつ公園。白い日傘。女の赤い唇。

そして母の背中。赤く輝くほおずきをじっと見つめる母の背中。

長い物思いから覚め、壁に手をやると、時計の針は12時を過ぎ
ていた。

空調がきいたマンションの一室は快適で、今が一番不快な時期で
あることを忘れさせてくれる。

……きっと今夜も帰つてこないのだろう。

わたしはため息をつきながら窓のカーテンを閉めようと立ち上が
つた。

ガラスに映つたわたしの顔はなんと母にてきたことだろうか。
テーブルの上には用意した食事が一人分、向かいの席にそのまま
残されている。

わたしの席には大きな封筒。一月前に受け取つた興信所からの報
告書がある。

封筒の上にはくしゃくしゃになつた写真が一枚。

白くゅつたりとしたマタニティドレスに身を包んだ女の写真。幸せそうに笑う女の写真。

あの日、興信所からの帰り道、気が付くとほおずきを一鉢買っていた。

これからどうしようか。
どうするつもりなのか。
わたしは途方にくれながらほおずきを見つめた。
赤く輝くほおずきの実を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7113d/>

ほおずき

2010年10月10日00時11分発行